

《特別企画》

徳島モンゴル医療交流協会

徳島大学名誉教授、中華人民共和国南通医学院名誉教授、モンゴル国立医科大学名誉教授、モンゴル歯科医師会名誉会員、徳島モンゴル医療交流協会理事長、ICDフェロー



西野 瑞穂

キーワード：徳島モンゴル医療交流協会設立の目的、モンゴル語翻訳教科書「小児歯科学」出版、モンゴル初の障がい者歯科診療室の開設

2017年4月、ICD日本部会雑誌編集担当理事より、徳島モンゴル医療交流協会について記事を書くようにとのお言葉をいただき、本記事を書く機会を得ましたことを深謝致します。

筆者は、2006年3月徳島大学を定年退職後、2006年7月から2008年4月までの約2年間、徳島大学・モンゴル健康科学大学間学術交流オーガナイザー、モンゴル健康科学大学歯学部客員教授として、無償で現在のモンゴル国立医科大学に滞在した。

この間、学生への臨床講義（図1）、アメリカ人、フランス人歯科医師と共に、孤児院での歯科診療（図2）、WHO主催によるモンゴル国23県1市の代表歯科医師に対する学校歯科健診に関する講演・実技指導2日間コース講師、モンゴル国厚生省主催市民公開講演会でDental Innovation in Mongolia と題する講演をオペラハウスで行うなど様々な活動を行った。

市民公開講演会はMedical Innovation in Mongoliaとして例年行われているもので、歯科医師による講演は初めてであった。それまですでに1年間モンゴルに滞在し、小児の齲蝕罹患率の高さ、歯学部卒業後1年目の歯科医師が唇顎口蓋裂の手術を実施、予後不良例（口蓋裂の再発）も少なくない、障がい者歯科診療室が無いことが問題であると感じていた筆者は、齲蝕予防の推進、卒後研修の充実、障がい者歯科診療室の開設・充実の3点をDental Innovation in Mongoliaとして講演した。歯科分野では初めての講演であったため、全国紙ウヌドゥル（Today）の記者のインタビューを受け、翌日紙面半ページを割く大きな記事として報じられた（図3）。

ウヌドゥルは全国紙であるため、その記事を見て、保護者が子どもを連れ遠くカントリーサイドからはるばる大学を訪れるという症例が数例あった。その中に



図1



図2



図3



図4

外胚葉異形成症の男児があり、口腔内を診る前に、「このお子さんは口の中に歯がほとんど無いので来られたのでしょうか？」と聞くと、保護者もモンゴル人歯科医師もビックリされた。子どもの髪の毛、眉毛、顔面の皮膚、咬合高径の低い老人用顔貌から我々には容易な診断も、当時大学病院の先生も未経験であった。

2006年当時、モンゴルには障がい者歯科診療室が無かったため、本ICD会員の方々と同様Dentistry for All健常者・有病者・障がい者すべてに歯科受診が可能であるべきと考える筆者は、一次帰国の際に寄付を募り器材を購入・寄贈、モンゴル初のDental Clinic for Special Care Needsがモンゴル健康科学大学内に設置された(図4)。

また、図書室にロシア語の古い教科書が有るだけなのを見て、日本の「小児歯科学」教科書をモンゴル語に翻訳出版することを提案した。教員の中にはせっかく翻訳するなら英語に翻訳したらどうかとの意見もあったが、筆者は、歯科医師はモンゴル語で患者さん

に説明しなければならないし、学生にはモンゴル語の教科書が存在するという誇りも必要ではないかと述べ、結局全員一致でモンゴル語に翻訳することが決まった。

「小児歯科学」の出版社、医歯薬出版の大きな支援(コピーライト)、全編著者の賛同を得て、翻訳書の発行が決定した。日本語の読めるモンゴル人教員は一人しかいない、2年以内には出版しなければならないという医歯薬出版との契約、このため筆者が英訳し、モンゴル人教員がそれをモンゴル語訳するという作業で翻訳を進めた。翻訳完了後、モンゴル国立医科大学内エルヘス出版社で、カラーの出来具合(口腔内写真はカラーが勝負)、製本の仕方(学生は教科書を何度も何度も開閉するので、製本が悪いとバラバラになる)等々細かくチェックして、2009年翻訳教科書を発刊することができた(図5)。モンゴル初の、モンゴル人による、モンゴル人のための翻訳教科書ということで当時のハグスレン学長が序文を書いてくださった(図6)。

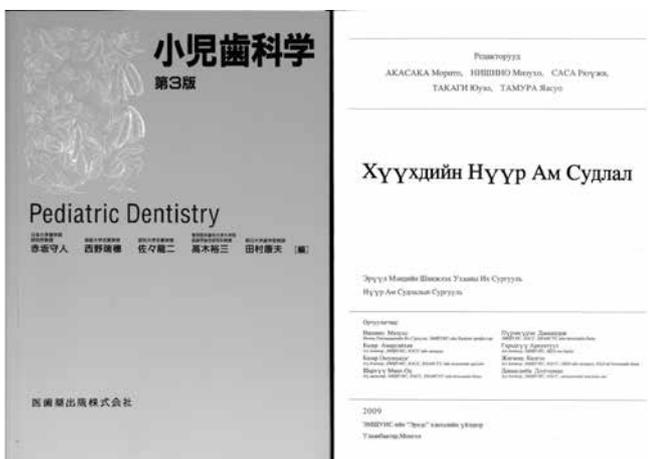


図5



図6



図7 翻訳当時歯学部長、現モンゴル歯科医師会会長
アマルサイハン先生と

日本の小児歯科学は、医療倫理、行動科学、有病児・障がい児歯科医療等広範囲な内容を含むため、歯科医学生はもとより歯科医師の方々の好評を博している。本年4月、国立モンゴル医科大学歯学部を訪問した際、偶然歯学部学生がこの翻訳教科書を使って勉強している現場に遭遇し、この上ない喜びを得た（図7）。

2年間の活動を終え、帰国する際、モンゴル健康科学大学名誉教授、モンゴル歯科医師会名誉会員の称号をいただいた。

また、2012年に設置されたモンゴル国立医科大学徳

島大学オフィスのオフィス長を現在まで務めている。

このような経緯を踏まえ、2015年3月13日に徳島モンゴル医療交流協会を立ち上げた。

本協会の目的は、

1. 徳島大学病院および徳島県の公立病院、民間病院からモンゴルへ日本人医師・歯科医師・看護師等の派遣（指導）およびモンゴル国立医科大学を中心にモンゴル国の病院から徳島へモンゴル人医師・歯科医師・看護師等の受け入れ（研修）事業の支援
2. モンゴルから徳島大学病院・徳島県への医療渡航（医療ツーリズム）の受け入れの整備と推進
3. モンゴル国立医科大学から徳島大学医歯薬関連分野への留学生に対する支援
4. モンゴル日本センターにおける日本語教育の推進
5. その他

であり、名誉顧問を飯泉嘉門徳島県知事、香川征徳島県病院事業管理者・前徳島大学長、白鵬翔第69代横綱をお願いしている。

本協会から提案した「モンゴル国乳幼児のむし歯予防」がJICA草の根技術協力事業に採択され、2017年から3年間本事業に邁進する。